

令和 5 年 5 月 17 日現在

機関番号：32617

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K17225

研究課題名（和文）共生型マルチエスニック・コミュニティ形成の社会的条件 ロサンゼルス事例として

研究課題名（英文）Building a Multi-ethnic Community - A Case Study of Los Angeles

研究代表者

土田 久美子 (Tsuchida, Kumiko)

駒澤大学・文学部・准教授

研究者番号：20553035

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ロサンゼルスのアジア系アメリカ人集団のなかでも、日系コミュニティを中心に分析した。その成果として第一に日系というエスニック・コミュニティの歴史の変遷である。同コミュニティは、構成員の多様化という集団内的要因とグローバル化の進行による社会の多様化という外的要因により、変化を経験してきた。特に第二に、2000年代以降のアメリカ社会の変化は、日系と他の複数の集団間の関係形成をよりいっそう生起させた。本研究では、資料分析、インタビューや参与観察に基づき、複数の集団間との協働関係形成のプロセスとその意義について、国内の学会で発表したとともに単著において明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は複数の差異（集団内・集団間）がどのように調整されるのか、という点に焦点をおき、コミュニティの再形成及び集団間の協働関係の形成プロセスを明らかにした。特にそれぞれの固有の経験が、集団間の相互作用のなかでいかに共有可能なものとして再定義されていくか、その過程を事例に即して明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research project mainly analyzed the Japanese American community among the Asian American communities in Los Angeles. This project first focused on how the Japanese American community changed over the years, especially during and after the time period of several social movements that the Japanese and Asian American groups were involved in. Also this project studied how the different communities worked together in spite of the difference in their historical and political experience in the U.S. society.

研究分野：社会学

キーワード：共生 コミュニティ エスニック・コミュニティ 日系系アメリカ人 アジア系アメリカ人

### 1. 研究開始当初の背景

異なる人種/エスニシティを持つ人びとが、同一空間において居住、または社会・経済的営みを行う場合に、いかに互いの排除や対立を回避し、公正な社会を構成していくことが可能となるのか。この問いは、グローバリゼーションによって人びとの移動がいつそう多様化する今日において、喫緊の課題である。こうした複数の人種・エスニシティの人びとが混住する状況においては、マイノリティ集団それぞれが持つ社会的資源の差異について、また、集団の多様性とマイノリティ集団間の関係へ関心を持つことが必要となる。加えて、エスニシティの流動性や可変性が指摘される社会において、もはやエスニシティを実体化した従来のアプローチは有効性を失いつつあるという議論もある(Brubaker 2006)。

その一方で、複数のエスニック集団による社会運動に対する研究が、とくにアメリカ社会では進められてきた。たとえば1970・80年代の汎アジア系集団による「アジア系アメリカ人運動」や近年、展開された移民に対する措置をめぐる抗議運動、さらには地域の文化遺産保護運動など、対象事例も構成集団も多岐にわたる(Okamoto 2003)。文化的な多様化が一層進む現代社会において、日常レベルの多文化共生実践とそれが可能となる要因および課題を明らかにすることが必要である。

そこで本研究は、アメリカ合衆国ロサンゼルス市において、異なる複数のエスニック・マイノリティ集団に基づくコミュニティ(再)形成に分析の照準を合わせる。本研究が事例として選択するのは、複数の集団が単に混住するコミュニティではなく、連帯関係の形成が行われているマルチ・エスニックコミュニティである。本研究は、そうした集団間の関係形成プロセスを、アクター間の相互作用に注意して考察する。具体的には、複数の異なるエスニック集団間において、それぞれのエスニック集団の文化的個別性の維持や集団間の社会的および政治的資源の格差から発生しうる分離は、いかに回避ないし調整されているのかを調査研究から明らかにする。

### 2. 研究の目的

近年、移民/エスニック集団に関する研究は、マイノリティ集団間の関係に注目することによっても社会統合のあり方を考える必要に迫られている。とくにエスニック・コミュニティに関する研究は、エスニック・マイノリティ集団間の社会的資源や政治的資源の格差、さらにはそれぞれの文化的特徴が、集団関係構築のなかでいかに処理されるのかという視点を捉え損ねてきた。このことに対し本研究は、アメリカ合衆国において複数の集団の協働を分析することによってアプローチする。事例の詳細な分析をとおして、集団間の文化的差異や社会的・政治的資源の格差は、いかに調整され、協働関係が形成されるのか、そのための社会的条件を析出することが本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

本研究は、複数のエスニック集団間の文化的差異や社会的・政治的資源の格差は、いかに調整され、協働関係が形成されるのか、そのための社会的条件を析出することを目的とする。その目的を達成するために、まずエスニシティ論、エスニック・コミュニティ論などの理論研究を行うことにより、実証研究のための論点の整理と分析枠組みの構築を行う。それを踏まえて、ロサンゼルスにおいて、連帯関係を志向するアジア系コミュニティを対象として聞き取り調査と参与観察によるフィールドワークを実施した。

本研究ではロサンゼルス日系コミュニティを中心にフィールドワークを行った。というのも、日系コミュニティは、アメリカ社会におけるアジア系としての長い歴史を持っており、そのなかで一定の社会・政治的資源を有してきたこと、さらには日系コミュニティを象徴する拠点としてリトルトーキョーというエスニック・タウンが存在するからである。また、研究者がそれまでの研究活動を通してすでに日系のコミュニティ団体とネットワークを持っていたため、研究プロジェクトの実現可能性が高いことも理由である。

#### 4. 研究成果

本研究は、ここまで述べてきたように、ロサンゼルスのアジア系アメリカ人集団のなかでも、日系コミュニティを中心に分析した。その成果として第一に日系というエスニック・コミュニティの歴史的変遷を明らかにした。同コミュニティは、構成員の多様化という集団内的要因とグローバル化の進行による社会の多様化という外的要因により、大きな変化を経験してきた。具体的には一方では日系集団の構成員の世代交代に伴い、それまでの世代に見られたような第二次世界大戦や戦後の複数の社会運動への参加などのように特定の世代に共通する経験が希薄化してきたことなどがある。同時に、2000年代になっていっそう進行したグローバル化により社会におけるエスニックな編成が複雑化したことと、ダウンタウン地区が継続的な再開発の対象となってきたことは、リトルトーキョーというエスニック・タウンの構成員の変化をももたらした。日系コミュニティは、日系というエスニック集団内の変化と、グローバルかつローカルな変化とをほぼ同時期に経験してきたと言える。

第二に、2000年代以降のアメリカ社会の変化は、日系と他の複数の集団間の関係をよりいっそう形成させた。特にリトルトーキョー地区においては、従来から居住またはビジネスを行っていた日系人（戦前の在米日本人移民をルーツにもつ人びとと戦後の日本からの移住者）に加え、日系以外の人びとによる流入が顕著となった。それは主には先述のダウンタウン再開発によって生じたいわば都心回帰現象の一つとして、リトルトーキョーの商業的または居住地としての価値が社会的に再認識されたことに由来する。それまでもリトルトーキョー地区は必ずしも日系だけによって構成されていたわけではなかったという点に留意は必要だが、2000年代以降のリトルトーキョー地区の急速な多様化は、リトルトーキョーの位置づけをめぐる課題をコミュニティに再提示することになった。それは、日系集団というエスニック集団を象徴する地域としての存続と多様性の受容との間の調整である。本研究ではこのような課題が顕在化するプロセスと、リトルトーキョー内における特に日系と韓国系との間の関係構築の試みについて学会で報告を行った。

第三に、他集団との関係構築としてアジア系のみならず異なる文化的背景を持つ集団と関係形成に関わる事例として、日系集団とイスラム教徒との協働についても対象のなかを含めた。これもまた2000年代以降に展開されてきた事例である。本研究ではこの事例分析を通していかに両集団の差異が調整されるのかについて明らかにした。この研究成果については、論文および単著のなかで取り上げた。

ここまで見てきたように本研究は、日系コミュニティを中心的な対象として、文化や経験、政治的資源などが異なる集団間の関係形成について事例分析を行った。他方、コロナ禍によってフィールドワークの実施が相当に困難であった部分も否めない。特に他のアジア系コミュニティを対象とした調査や分析については今後の研究課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Kumiko Tshucida	4. 巻 0
2. 論文標題 A Japanese Student Learns from the History of NCRR	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 NCRR: the Grassroots Struggle for Japanese American Redress and Reparations	6. 最初と最後の頁 340-341
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 土田久美子
2. 発表標題 エスニック・タウンの変遷 - LA・リトルトーキョー再開発に対するコミュニティの対抗戦術に注目して
3. 学会等名 東北社会学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 土田 久美子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本能率協会マネジメントセンター	5. 総ページ数 247
3. 書名 日系アメリカ人とリドレス運動－記憶と集合的アイデンティティをめぐる社会運動のダイナミクス	

1. 著者名 長谷川公一, 李妍炎, 帯谷博明, 高橋知花, 青木聡子, 中川恵, 朝井志歩, 土田久美子, 金明秀, 大井慈郎, 小杉亮子, 山本薫子, 篠原千佳, 伊藤綾香, 板倉有紀, 本郷正武	4. 発行年 2020年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 392
3. 書名 社会運動の現在	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------